

奈良時代の土製支脚

奈良時代前半（8世紀前半）の竪穴建物から土製支脚が出土しました。建物のほぼ中央には火を焚いた場所があり、ほかに須恵器の坏や高坏、移動式の「カマド」の破片などが出土しています。建物の中には造り付けの「カマド」はなく、こうした土製支脚や移動式の「カマド」を使って煮炊きをしていたようです。

イラストは土製支脚の使われていた様子を復元しています。2つまたは3つをセットに向かい合わせ、その上に甕などを載せ、下から火を焚いて煮炊きをするために使用した、いわゆる「五徳」と考えられます。

土製支脚は地域ごとに特徴的なタイプがあります。今回出土した支脚は本体が筒状（中空）に作られており、鳥取県中部（東伯耆）に多く見られるタイプです。把手を持つものは島根県東部（東出雲）から東伯耆にかけて数例見つかっていますが、非常に珍しいタイプです。

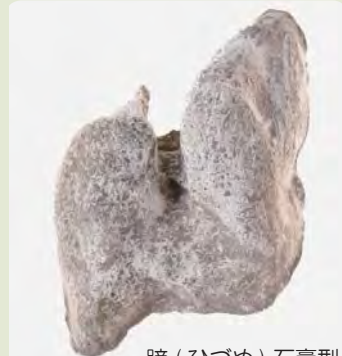


中世の田畑と足跡

流路の東側では、鎌倉時代の水田（9ヶ所）と畑（1ヶ所）が見つかりました。水田は畔で方形に区画され、さらに小さく区切られていました。残りのよい畔の高さは10cm程ありました。水田、畑とも深さ数cm程の、地面を深く耕した際にできた犁の痕跡が、東西方向に密集していました。

4区北半部では、流路が埋まった後、鎌倉時代に営まれたとみられる水田の上から、多数の足跡が10箇所ままとまりをもって見つかりました。洪水で水田が砂に埋もれた際に足跡に砂が入りこんだため、数百年間そのままの形で残っていたものです。

足跡の多くは「偶蹄目」という先が二つに分かれた蹄をもつ動物の足跡です。人の足跡とともに見つかったので、牛の足跡と考えられます。これらの足跡は東西方向の列状に何箇所かのままとまりがあります。人や牛が農作業の際に、歩いた方向、すなわち水田の区画を示している可能性があります。



木製祭祀具

大鴨遺跡や石塚廃寺東遺跡の流路から、木製祭祀具が出土しました。これらの祭祀具は、その形や周囲から出土した土器から奈良時代のものと考えられます。

主なものは、「斎串」「人形」「刀形」「馬形」をした「形代」です。斎串は、祭祀を行う場を区画する結界に用いられ、人形はケガレを移して川へ流したと考えられています。

斎串の多くは薄い板状で、2区でまともって出土した斎串の多くは両側に連続する切り欠きがあります。その他に、先端を尖らせただけのものや、角棒状のものもあります。

人形・刀形は木製構造物の中からほぼ完形のものが出土しています。馬形は尾部を欠損していますが、鞍の表現があり、腹部の側面には立てて使うための小さな板が埋め込まれた痕があります。

これらの斎串・形代はケガレを祓うなどの「神マツリ」に使われたと考えられます。お寺の近くでこうしたマツリが行われていたということは、当時は「神と仏」の区別があまりはっきりしていなかったのかもしれませんが。



ロマンチック街道の

遺跡を掘る！

第6号 2022年3月1日

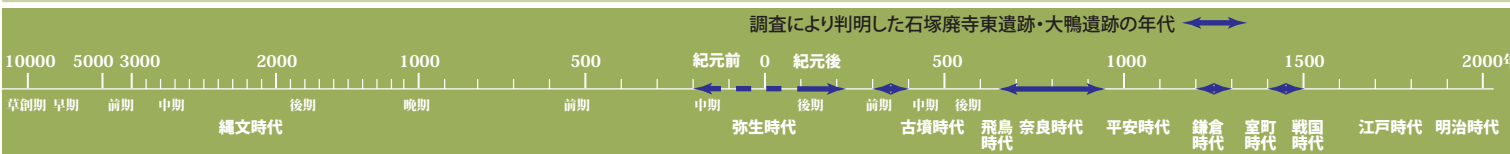
（公財）鳥取県教育文化財団調査室では、一般国道313号の道路改良工事用地内にかかる石塚廃寺東遺跡と大鴨遺跡の発掘調査を令和2年6月から開始し、皆さまのご理解とご協力のもと、令和3年12月に無事終えることができましたので、その成果をご紹介します。



石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡の発掘調査成果

（①は石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡、②～⑤は大鴨遺跡の成果）
石塚廃寺東遺跡・大鴨遺跡は倉吉市石塚から福山にかけて広がる集落・祭祀遺跡です。通称「天神野台地」と呼ばれる丘陵の裾部に立地し、県史跡石塚廃寺跡の東から南東側に隣接します。

- ①奈良時代から中世に至る川跡が発見され、寺院周辺の景観の一端が明らかとなりました。
- ②多量の木製祭祀具（奈良時代）が川岸で出土しました。出土地点と石塚廃寺跡を結ぶ道路遺構が見つかることから、寺が関わる水辺の祭祀が行われていたことがわかりました。こうした祭祀は当時の役所（官衙等）付近で見つかる事例は多いですが、寺院との関わりが明確なものは全国的にも極めて少なく、県内では初めての確認となります。
- ③奈良時代の流路に沿った南北方向に延びる道路遺構や、流路の西側で東西方向に延びる道路遺構が確認され、寺院と地域を結ぶネットワークの手がかりが得られました。
- ④鎌倉時代の建物群と水田跡が発見され、屋敷地に耕作地が隣接する景観が復元できます。また川の埋没後、水田などの耕地として開発されていく様子が明らかとなりました。
- ⑤古墳時代前期の竪穴建物が検出され、奈良時代以前の集落の存在が確認されました。



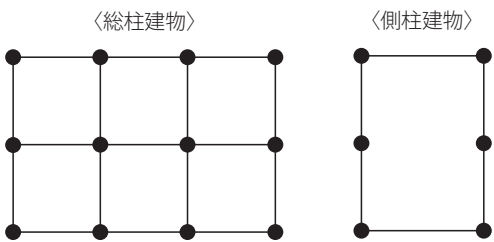


【大鴨1区】掘立柱建物2

【中世の建物】

流路の東側では、鎌倉時代の掘立柱建物が8棟（掘立1～5、24～26）見つかりました。1区の建物群は2間～4間×1間～2間、柱穴は素掘りのものや、柱を支える礎盤石や根石で基礎固めをしたものもあります。いずれも総柱建物で、大型のものは母屋であった可能性があります。

4区の建物は1間×2間～2間×2間、柱穴は素掘りで直径は20～40cm、いずれも側柱建物です。1区の建物群よりも規模が小さいため、納屋や作業小屋などの簡易的な建物だったのかもしれません。



【大鴨1区】火葬墓(S8)

【火葬墓】

1区の北東で2基の火葬墓が見つかりました。このうち1基は残りがよく、火葬された様子がよく分かります。頭を北（写真上）にして、膝を抱えたように西方向（写真左）を向き、頭の近くには素焼きの皿（土師器）が供えられていました。この皿の形や作りから、室町時代の墓であることが分かります。



【大鴨2区】道路遺構(S51)

【道路遺構】

古代の流路の東岸に沿って南北に延びる道路遺構（S302・303・365・678）は、長さ約120mになります。道路の底面に小さな穴が並び砂や礫を詰めていました。また、流路の西側では東西方向に延びる礫を敷いた道路（S278・358）や水辺の祭祀場へつながる道路（S51）が見つかりました。



【大鴨4区】道路遺構(S365)

【木製構造物】

流路の中から、木や枝で造られた構造物が見つかりました。この構造物は流路の中に張り出すように位置していることから、土手の芯材ではないかと推定しています。川の流れを弱めて祭祀を行う水辺を作るための土手（堤）かもしれません。

【水辺の祭祀場】

両側面に連続する切り欠きを施した斎串と呼ばれる木製祭祀具（木を素材とするマツリの道具）が見つかりました。木製祭祀具はバラバラにならずにまとまっていることから、「マツリ」を行った後に、まとめて廃棄されたと考えられます。



【大鴨2区】木製構造物(S76)



【大鴨2区】斎串出土状況(S171)

【県史跡 石塚廃寺塔跡】

石塚廃寺跡は、奈良時代創建、平安時代に廃絶したと推定される寺院跡です。南門・塔・金堂・講堂が連なる四天王寺式伽藍配置で、塔心礎（直径2.2m、柱孔直径0.7m）は県の史跡に指定されています。



県史跡石塚廃寺塔跡



【古墳時代の建物】

4区の北東で古墳時代前期の竪穴建物が2棟（竪穴3・4）見つかりました。竪穴3は4.9m×4.2m、竪穴4は5.9m×5.7mの隅丸方形のプランをしています。屋根を支える柱の穴が4～7本、中央に用途不明な穴（中央ピット）がそれぞれ確認されました。竪穴4の中央ピットは長方形の穴の中心に、さらに方形の穴を穿った特徴的なものでした。



【大鴨4区】竪穴建物4 中央ピット



【大鴨4区】竪穴建物3



【大鴨4区】竪穴建物4